

れている。

さてこの玄武岩は別にしても六連島の石は、安山岩・泥岩・砂岩などで軟弱な質であるから、碑としての利用は上田様の考えと同じで適当でない。

そこで私は六連島から、うに加工法の火を点し、それが元となり下関の地に多くの加工業者が育ち発展した経緯を察するとき、六連島の石に代わる碑石としては、六連島の東側に向する下関の海岸線での、自然石が最もふさわしいと考えた。

だが、探石して適当な自然石が発見できなかったときは、上田様の石屋さんに一任されたとの言葉通りにと、お断わりの決心をしていた。

そして探石行は石質の良い所の安岡町の海岸線を出発点として、彦島の西山海岸までと計画し、干潮時に奔走した。

探石の結果は西山海岸近くに至るも適当な石との出合いは無く、落胆していたとき、思わぬ場所と思わぬ石質の良い石との出合いがあったのである。

その場所とは小瀬戸の略「小門」に接する筋川町の「山陽ハイミール（株）」（社長の宮永和男氏が上田玲子様のごと）「工場下の海岸である。この辺りは地学の資料によると下関亜層群上部層（火山岩優勢層）で安山岩・デイサイト質・流紋岩質・凝灰岩となつ

ているが、私の足で調べた結果、僅かながら北浦方面に広範囲に見られる白亜紀前紀の脇野亜層群（頁岩・砂岩・礫岩など）もあつた。

そこで拾う石肌は、真黒、黝色、紋様などで、ものすごく硬く叩くと金属音を発する、石質の緻密なものである。だが遺憾ながら量が少なく、碑としての適当な大きさのものが無かつたので、次の場所へ移ろうとしたとき、山陽ハイミール（株）敷地岸寄りの砂の中に、海流物のコールタールが厚く付着している。幅の広いところで直径三十センチ位の円やかな風化土肌の石があつた。思はず持参していた道具で掘り起こしてみると、ローソクの炎の様な形をしており、高さ二十九センチで左右均等であつた。風化土肌であることから、大昔荒波に洗われ丸みを帯び、後で弱い熱質を受けて生成したと思われる。したがって海の近くにあつたとしても、護岸工事で日の目を見た石とも考えられる。

いずれにしても石の内部が知りたいので、手沢鑑賞石ではない工事用としての石扱いであることから、石質調べのハンマーで石底部を少し欠いてみた。結果は下関亜層群下部層（推積岩優勢層）での水に濡れると黒一色肌になる（真黒石）砂質ホルンフェルと思われる石であつた。素晴らしい石の形と石質に躍る心を抑えて、この場合は元の砂の中に埋め、後日、上田様に見ていただき了解を仰ぐこと

にした。早速上田様に連絡をとり、更に郷土史家であり、乃木流水石会の監査役でもある清永唯夫氏に立ち合い人として同行を願つたのである。

現場に着いて海水にその石を浸してお見せしたところ、上田様・清永様から素晴らしい石であると、称賛の言葉を頂いた。上田様は信仰心が厚く持参された塩で石肌を清められた。

目を沖合に移すと、そこには点と線で結ばれたが如く六連島が浮かんでいた。三人は城戸翁の靈魂に導かれたような思いがしたのである。

そしてこの場所が昔は六連の人達もうにの採集に訪れた場所であつたことを後で知つた。三人はこの日の記念にと、それぞれが小さな石を拾つた。そして碑石となる石は私の背に荷となつて、日の目をみることになつたのである。

碑の製作工事を乃木流水石会の役員でもある山陽町埴生の前田石材店の前田隆一氏にお願いすることで、その工場に搬入して石に付着しているコールタールを除去し、少し風化土を削除してもらつた。

更に石を据える安定のため、石底の欠いた所を少し削いで平にした。この時点まで私の頭の中でこの石は碑の母体とし、これに乗せる揮毫石（正四角形の平面的な台石）と組み